§ ５　まとめ「冒険とスカウティング」

●目標

1　「.ワクワク・ドキドキ」のスカウティングには冒険的要素が必要であり、それには「危険因子」が伴うことを知る。

2　.しかし、時には失敗することもあり、自分の努力次第で成否が決まると感じられているから、挑戦のしがいもあり、そこに達成の喜びも感じられることも知る。

●指導上のねらい

1.　ワクワク・ドキドキの魅力あるプログラムは、ある意味で「危険」を伴うプログラムでもある。よく『安全は全てに最優先される』といわれているが、それでスカウトたちは、本当に成長するのであろうか。

2.　教育とは、基本的に子どもたちに新たな体験に熱意を持って取り組むことを善とする価値観の世界であり、そこには必然的にチャレンジがある。そして チャレンジと危険は時には紙一重の関係にある。危険な活動を一切しないと いうことは、そのチャ

レンジの機会を奪い去ってしまうことを意味する。

3.　また、危険が内在する行為をすること自体、ある程度までは社会的に許容されている。法律の中でも「許された危険」という考え方がある。社会生活の中にはある程度の危険はつきものであり、危険を否定しては社会 生活は成立しないし、よしんば成立

したとしても失われる利益（この場合、新しいことへのチャレンジ）も大きい。

●留意点

　　まとめとしてのセッションです。

●準備品

　　なし

●セッションの進め方

１．展開（20 分）

（以下は資料）

①　「冒険」というものには常に「危険」というリスクがつきまとうが、そこに「冒険」の持つ魅力があり、私たちを惹きつける。

●　冒険者とは

「危険を楽しむ人、危険に挑む人。」

こんな人たちをここでは冒険者と呼ぶ。リスク心理学の言葉を使うなら、リスクを承知で危険なことをするリスクテーカー（risktaker）である。

危険に無頓着な人とは、危険の存在をあらかじめ認識している点で大きな違いがあるが、行動面では、区別がつかないことがある。たとえば、子供の多くは、危険に無頓着なために危険なことをするが、彼らを冒険者とは見なさない。（ちなみに、子供時代の冒険体験は大事である。）

●　冒険者にも２種類がある

冒険者には、ポジティブ冒険者とネガティブな冒険者とがいる。

ⓐ　ポジティブな冒険者とは、たとえば、

・誰にもできないと思われていた難度の高い技に挑む

・人類未到の大陸横断に挑む

・誰もが解けないと思っていた問題を解くのに挑む

いずれの例も、社会を明るくし社会を進歩させるのに役立っているし、結局は、人類の進歩にも貢献することになる。これは、本人自身が危険の結果のすべてを引き受けることになるので、普通は、安全、安心の問題にはならない。

ⓑ　ネガティブな冒険者とはこんな人である。

・交通ルールを無視してスピードを楽しむ

・ギャンブルにあり金のすべてを注ぎ込む

・人に良いところを見せたくて出来もしないことをする

彼らの多くは、社会的なインパクトへの配慮をかき、自分の楽しみ、自己顕示力の発揮、思い込みのために、自分を破壊させるだけでなく、周囲にも多大の迷惑をかける。

　●　危険を引き受ける難しさ

この世で生きていこうとする限り、いつでもどこでも程度の差はあっても 危険はある。それにおびえてしまえば、生き方が臆病になる。「縮小人生」 を送ることになる。そうかといって、日々の生活や仕事で、いつも危険と格闘しなければな

ら ないようでは、今度はストレスに負けてしまう。危険とのつきあいは、何にしても極めて難しいところがある。

　●　危険に備える

どんなリスクがどれくらいの確率で存在するかを知ることをリスク認知という。

リスク認知の感度と精度が優れていれば、事前にリスクを回避したり、それに備えることができる。それが鈍っていれば、リスクにもろに直面してしまうことになる。冒険者はリスクの認知には優れている。したがって、リスクがもろに自分に降りかかることがないように、あらかじめ周到な準備をしてから行動をする。

 安全、安心ばかりを求めてしまうと、ポジティブな冒険者であっても、その行動にはつい批判の目を向けたくなる。「そんな無謀なことをして」「身の程知らず」と言いたくなる傾向がある。しかし、あまりその批判が強くなりすぎると、社会全体が「縮小社会」になってしまう。

　●　領域分け

この領域ではリスクの高い行動を認めるが、この領域では、認めない、というように領域によって、リスクとの付き合い方を変える

たとえば、ベンチャースカウトの冒険旅行

・自分の能力以上の無計画でな行為――例えば「カナディアンカヌーで、波の荒れ狂う外洋にこぎ出して旅行する――は、スカウト個人では対しようのない「コントロールできない危険」であり、それは絶対に許されない。

・波がそれほどでもない湖水で、事故予防のための十分な計画と訓練と準備をした上での挑戦的なチャ レンジは「コントロールできる危険」であるので実施を進める。

 このような領域分けの考えは、２つの点でメリットがある。

 　　一つは、人生、社会を縮小させる力と拮抗できることである。

安全、安心問題は、考えれば考えるほど、「危ないことはするな」「危険を避けよ」となる。そのためには、やりたいこともやらないほうが良いとなりがちである。それを、この領域では、大いに冒険してもよい、ということになれば、人生にも社会にも活力が出てくる。

もう一つのメリットは、リスク意識を高めることである。

リスクによって領域を分けるためには、あらかじめリスクへの備えが十分 か、さらに、リスクに遭遇してもその対処ができるかどうかを常に考えておく必要がある。このことがリスク意識を格段に高めることになる。

（③出典）

 <http://blog.goo.ne.jp/hkaiho/e/dbe8f7450c94714e2b5cd6ca4c81fee1/>

「冒険者」安全・安心の心理学」新曜社　　海保博之のブログ　を編集

1. スカウティングにおける「危険」との付き合い方（提案）

行っていい冒険の指標として、同じ冒険→今のスカウティングで言われていること「安全は全てに優先する」つまり、危険な　　　　　ことはしてはいけない！！と言うことだ。それではスカウティングではない。だから、スカウティング がつまらなくなったのだ！！スカウトは、冒険家であり、開拓者であり、パイオニアなのである。ボーイスカウトにおける、班集会や組集会は隊集会のための「作戦会議」である。つまり、その作戦の中には、どう戦略を立てるかの他に、どうやって全員が無事に乗り切れるかも当然含まれている。

そのために作戦を立てて、練習をするのだ。リスクを想定してそれに対処すべく、知識を習得したり、技能を上げたりして、自分の能力を上げることで安全管理をし、リスクに備えるのだ。

であっても、我々指導者（若しくは実際にそれを行うスカウト）がコントロールできる危険の範疇であれば、満たすべき条件はいろいろあるがそのプログラムは実施可であろう。（あくまでもコントロール下に置いておけることが必要条件）。

 しかし、コントロールできない危険に対しては、それが存在するプログラムを実施することは避けなければならない。

しかしながら、「コントロールできる危険」をコントロールするための十分な計画と訓練と準備をした・・・・・ことは、誰がそれを判断するのだろうか。今の指導者にそれだけの判断できる「経験と実績」はあるのだろうか。おそらく無いであろう。だとしたら、「それをやらない」・・・ではなく、環境を 整備（ここでいう環境とは「人的環境」→つまり、保護者であり、地域社会に理解し手もらうこと）して、低いレベルから何度も繰り返し練習をして、1 ステップずつクリアして、求められるステージに達することをしなくてはならない。このコントロールは、知識や技能の習熟度、運動能力のレベルアップ等によって、その対応範囲がどんどん変化していくものである。

 　　そして、その道の専門家のお墨付きをもらった上で、初めてその実行段階に進むのである。

これには、先に述べた「家庭（保護者）」の理解が得られなければならない。

そこが現代の最大のネックになっている。

（例）

 　　作家であり、カヌーイストの野田知佑（ともすけ）さんがよく言っていることは、戦後、行政や学校が口を揃えて「川は危ないから、そこで泳いではいけない」と児童・生徒を洗脳した。それによって、川遊びという昔ながらの伝統の遊びはほぼ途絶えてしまった。今の親の世代は、ほとんど川で遊んだ経験がない。

そのため、その子ども達も当然、川で遊ぶという選択肢を与えられないまま大人になっていった。その子どもも…。

川が危険なのではない。川遊びの危険をコントロールできるだけの知識と 技能を持っていないから危険が顕れてくるのである。事実、川ガキ（川遊びの知識・技能を持った子ども達）どもは、平気で遊んでいる。野田さんに よれば、こど

もを１日中川で好きなように遊ばせておけば、彼らは自然に川ガキになっていく。子ども達が持って生まれた能力を引き出せるきっかけを作ってやるのが、大人の役割じゃないのか・・・・・と